

### 玄先生への手紙

吉野, 紗都 / 海野, 里奈 / 森村, 修 / 鈴木, 靖

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

156

(終了ページ / End Page)

161

(発行年 / Year)

2016-04-01

## 「玄ちゃん」のこと

森村 修

私は、玄宜青先生とは専門の学問も違うし、出講曜日の関係で、大学でお会いすることもそれほど多いわけではありませんでした。そのように関係の薄い私が、玄先生の追悼文を書くというのも、先生に対して申し訳ないような気がします。

「なんで森村さんが、私の思い出話なんて書いているのよ」という、あのハキハキした声が聞こえてきそうです。

それでも、数少ない玄先生との関わりの中で、今でも忘れられないことがあります。何年か前のある教授会の席で、玄先生と学部長との間でちょっとした論争がありました。私には、玄先生が、教授会で事務的な報告以外でご自身の意見を強く言われた記憶がなかったの、そのときの玄先生の態度にとっても驚きました。

今となっては、何を議論していたのか、すっかり失念してしまいましたが、玄先生がいつになく語気強く、学部長に対して問い尋ねていたことははっきりと覚えています。玄先生は、学部長の言いたいことを自分が誤解しているかもしれないし、日本語があまりうまくないので、自分の言いたいことがきちんと伝わっていないかもしれないと断りながらも、学部長に意見を言い続けていたように思います（私の記憶も曖昧なので、記憶違いもあるかもしれません。あくまで私の印象ですから）。

教授会の翌日、たまたま私が国際文化学部資料室でパソコンを使っていたときに、隣で作業をしていた玄先生が、「森村さん、ちょっといい？」と小さく声をかけてきました。私がいいよと答えると、玄先生は、すかさず「教授会のときの私って、頭がおかしかったかな？ どう思った？」と聞いてきたのでした。私は学部長との論争のことだとわかったので、「そんなことはないよ、別にいいんじゃないの、あのくらいは」と笑いながら答えました。

それでも玄先生は、「私の言っていることは間違っていなかったかな？ 私の言いたいことが伝わったかな？ 教授会の先生たちは変な人間だって思わなかったかな？」と立て続けに聞いてきたのです。そのとき私は、玄先生が自分の態度があまりに突飛なことだったと反省し、心を痛めていることを知りました。私はそれほど気にすることではないし、何もおかしなことは言っていないと思うと慰めたのですが、彼女はなかなか納得してくれません。それでもなんとか説得したら、最後には「ありがとう、森村さんに話してよかった」と笑ってくださり、ご自分の作業に戻っていかれました。

それから彼女は、私の姿を大学の構内で見かけたり、資料室で私の声がしたりすると、

わざわざ声をかけてくださるようになりました。あるとき、58年館の構内で玄先生と立ち話をしていたら、「玄ちゃん！」と声をかけてくる男子学生の集団がありました。私たちが振り向くと、彼らは玄先生に手を振って駆け寄ってきたのです。彼女は「うるさい、早く行きなさい」と彼らに大声で答えると、彼らも「またまた、照れちゃって」と笑いながら通り過ぎて行きました。彼女に「どこの学部の学生なの？」と聞くと、経営学部かどこかの学生だそうで、「やたらとなついてきて、うるさくて仕方ない」とこぼしていました。

それでも、その表情はまんざら嫌そうではなかったのです。学生のことが可愛くて仕方がなく、男子学生たちの明け透けな態度にも好感を持っているようでした。私の知らなかった玄先生の一面が覗けたのを、とても印象深く思い出します。

玄先生が病気のために長期休職に入る前日、資料室の方たちにご挨拶をしているときに、私が資料室に入っていくと、「あー、よかった。森村さんに会えてよかった」と笑みを浮かべて迎えてくれました。「今度の入院はちょっと厳しいみたい。長くなりそうなんだ。でも必ず帰ってくるからね、必ず戻ってくるからね、治るように祈ってね」と、あの調子で立て続けに言うのです。もちろん、彼女のなかにはある種の覚悟があったのかもしれませんが、私にはわかりません。私も、玄先生が厳しい状況にあることは、それ以前の彼女との会話や様子からわかっていましたので、「大丈夫だよ、必ずよくなるよ、頑張るってね、快復するように祈っているよ」と答えるのが精一杯でした。

私は、大学でまたお会いできると信じておりました。彼女のことだから、私のそのような気持ちを理解してくださっていると思っていました。だから、玄先生がお亡くなりなされたことを聞いたときには、ショックで何も考えられなくなりました。玄先生が長い闘病生活をどのようなお気持ちで過ごされたのかと思うと、心が締めつけられるような思いがあります。

玄先生と資料室で過ごしたわずかな時間のなかで、彼女が見せた寂しさとも頼りなさとも思える表情で、「大丈夫かな？ 私の言っていること、間違っていないかな？」とお聞きになったことを、今でもありありと思い出します。あのとき私は、玄先生の不安なお気持ちを少しでも慰められたのならば、よかったと思うばかりです。そして、最後にお会いしたときに、「大丈夫だよ、絶対によくなるって信じているよ」とお伝えできたことで、少しでも彼女のつらいお気持ちが和らいだのなら、私との薄い短い関わりにも意味があったと思うだけです。

玄ちゃん、もういろいろなことを気にやむことはないですよ？

やっとうっくりとお休みできますね。

今まで、本当にありがとうございました。

合掌

## 玄先生を偲ぶ

鈴木 靖

中国のことわざに「養不教、父之過；教不嚴、師之惰（産み育てるだけで教育を与えないのは父の過誤であり、教育に厳格でないのは教師の怠慢である）」というのがある。中国の伝統的な教養を三字ずつにまとめた識字書・『三字経』の中の一句だが、近年この「父」が「虎媽」（教育ママ）に変わりつつあることを除けば、その精神はいまも中国に生きている。

先年、米国で *Battle Hymn of the Tiger Mother* という本が出版された。Tiger Mother とは文字通り「虎媽」のこと。著者はエール大学教授で、二人の娘の母でもある Amy Chua。中国にルーツを持つ彼女が、娘たちを相手に行った中国式教育の顛末を記したものが、あまりのスパルタぶりに全米で大きな話題となった。

玄先生は中国人と日本人のハーフだが、こと教育に関しては中国の伝統的な精神を受け継いでいたらしい。数年前の S A 帰国報告会でのこと。久しぶりに顔をあわせた学生たちが騒いでいると、突然大声が響いた。

「あんたたち、うるさい！ちょっと静かにして！」

会場は一瞬にして静まりかえった。声の主はなんと玄先生。帰国したばかりの学生たちから話を聞くことができる報告会を、S A の質保証や危機管理のための重要な機会と考えてからである。突然の大声にオロオロした私とは対照的に、学生たちは何事もなかったかのように平然としている。後で学生たちに話を聞くと、教室でもよく怒られていたので、むしろ「懐かしかった」という。

その後、卒業生からも同じような話を耳にした。卒業生たちは皆あの大声を懐かしく思っているという。学生と真摯に向き合う責任感と熱意が感じられるからだという。

玄先生はまた大の電話好きでもあった。話し出すと一時間は止まらない。あの流暢な日本語はきっとそうして身につけたのだろう。そんな長電話の中でふと弱気な言葉を漏らしたことがある。

「今度、入院したら、お見舞いに来てね。病気に負けないよう、お守りもお願い。元気になったら、またがんばるから。」

闘病生活に明け暮れた数年間は、想像もできないような恐怖の連続だったに違いない。そんな中でも最後まで希望を捨てることなく、学生の指導に心を砕いていた。

玄先生はこの世を去ったが、その責任感と熱意、そして最後まで諦めることのなかった強さは、あの大声とともに学生たちの心に生き続けるに違いない。

玄先生、いや玄さん、もう闘病生活の恐怖に苦しむ必要はなくなりましたね。どうか安らかにお眠りください。そして、学部の将来と学生たちの成長を見守っていてください。

心からのご冥福をお祈りします。

## 玄先生への感謝

国際文化学部国際文化学科 13期生 吉野紗都 (2014年度卒業)

国際文化学部国際文化学科 13期生 海野里奈 (2015年度卒業)

玄先生との出会いは大学2年生の中国語の授業である。少しでも発音が違うと間髪入れず訂正が入り、宿題をやってこないものなら容赦なく順番が飛ばされる。私語を嫌い、うるさすぎると授業を中断する。中国語をもっと上達させたいと考えていた私たちにとって、玄先生はまさに理想の中国語の先生であった。勿論、厳しいだけが理想というわけではないし、玄先生はただ厳しいだけではない。先生は頑張っている学生を非常に評価してくれる。自発的に質問したり、積極的に作文を発表したりする学生には、時間を割いて徹底的に解説して下さる。

また、授業中に配られるプリントの枚数はどの授業よりも格段に多い。その当時はどさつと束で配布されるプリント、宿題の多さに悲鳴をあげていたが、卒業した今思い返すと、お一人であのプリントを作成し、印刷するのに一体どのくらいの時間を割いて下さっていたのだろう。玄先生は表向きは厳しく学生に対応しているように見えるが、中身は愛情にあふれていて、学生のことを何よりも優先させて考えて下さり、それゆえの厳しさでもあったのかと思う。一言で言うとSA中国皆の「お母さん」的な存在であった。

反日デモが最も激しかった2012年度の私たちのSA。上海に着いて1週間で外出禁止令になった程だ。街を歩けば何人だ?と問われ恐怖に怯える中、玄先生はすぐに会いに来て下さった。玄先生のお顔をみて、皆安堵の表情を浮かべていたのを覚えている。「大丈夫だから、安心してSA生活を充実させて」、と皆に声をかけて下さった玄先生に、どれほど励まされたことか。帰国後に盗難に遭ったり詐欺にあったという私たちの帰国レポートを読みながら、「とてもはらはらしましたが、無事帰ってきてくれてよかったです。」と仰っていた先生が忘れられない。普段の厳しいイメージの玄先生の言動からは想像できないが、こういった一言から、先生がいかに私たちを心配し、案じて下さっていたかを思い知った。

私、吉野は、卒業後、玄先生が体調を崩されていると聞き、先生にメールを出したことがあった。その返信は今も大切に保管し、辛くなったり、先生を思い出したい時に見返している。先生は2016年入試受験者用向け学部パンフレットに載った私を見つけて下さったらしく、「学部のパンフで吉野さんを拝見しこちらもとても嬉しかったです。やはり地味でも真面目な学生さんがめだったほうがよくて、これからくる後輩のためにも。社会人一年生はきっと大変だと思います。でも吉野さんなら強さもあるのできっと慣れると思います。でも無理はしないで、たまにはいい加減でも良いと思います」飾り気のない言葉の中にも優しさが混じ

る、玄先生らしさの詰まったお言葉だと思う。学生時代はいつも「もっともっと油断せず頑張りなさい」と仰っていた玄先生の、たまにはいい加減でもいいというお言葉、きつといまの私をそのまま受けとめて強く励まして下さったんですね。玄先生はいつも「力になれないけれど」ととても謙遜なさるが、サポートは何よりも厚く献身的であった。卒論に悩んでいたら、「私は専門じゃないから力になれないけど、なんでも聞いてね」といい、偶然見つけたからと言って、度々関係ある記事や文献、写真を送って下さった。また就職活動中も、「力になれないけど」とSA中国のOBOGの先輩を紹介して下さいたり、いつも困った時はさりげなく支えてくださっていましたよね。そんな優しくして学生思いな玄先生が私は大好きである。現在、社会人1年目として失敗を重ねながらも、日々もがいている。学生時代と大きく変わってしまったのは、中国語を使う機会が極端に減ってしまったことである。中国語を使えず寂しいと感じる時、決まっていつも玄先生を思い出す。

私、海野は、玄先生に、教育実習、派遣留学の際に大変お世話になった。中国語で教育実習を行う学生は少なく、非常に不安を感じていたが、そんな時に、精神面や、中国語の指導面で支えて下さったのが玄先生であった。事前に作成した教案を添削し、細かい文法項目での注意点などにも気づかせて下さった。教育実習や派遣留学について相談した際に、先生はいつも、「無理のない範囲で頑張ってください」と仰って下さり、私の心身の健康を気遣って下さっていた。特に、派遣留学に行くことが決まった際には、「中国語だけではなく、英語を身につけて、もっともっと世界に出ていきなさい」と、挑戦のためにあえて英語圏を選択した私の決断を、全力で後押しして下さい。留学中に、精神的に疲れてしまった時、玄先生から頂いた励ましのお言葉は、常に私を支えてくれた。いつでも私たち学生に真摯に向き合って下さる玄先生から、私は、教育者としての姿勢を学ばせて頂いたと感じている。いつか教育に携わる際には、玄先生のような厳しさと愛を兼ね備えた教育者になりたい、と強く決意している。卒業後は、念願であった海外営業として働くことになっている。玄先生から学んだ中国語と、応援して下さいだった英語を、仕事で生かし、日本と海外との架け橋のような存在になることで、先生に恩返ししたい。

玄先生という大切な存在を失った今、これからも中国語を続けることが、私たちにできることであり、これからも玄先生と繋がってられる唯一の方法ではないかと感じています。今まで玄先生からご指導いただいたことは決して忘れません。芯が強い玄先生とはいえ、病気の怖さは計り知れないものであったと思います。どうぞ安らかにお眠りください。本当に今まで大変お世話になりました。